

笑顔から学んだこと

城南中学校 一年

わたしはこの夏休みに、母が働く障害者支援し設で行われた夏祭りのお手伝いをしました。母から「一緒にやってみる？」と声をかけられた時は正直、少し不安な気持ちがありました。母の働くし設には小さい頃からときどき行っていたので知っている人も少しだけいますが、大勢の人がいる中で私が役に立てるのか、知的障害のある人とどう接すればいいのか、自分にできるのか分からなかったです。

当日は、夕方からし設の職員さんと屋台の準備から手伝いました。理事長さんから「今日は楽しんでください」と言ってもらい、利用者さんも興味深そうに挨拶に来てくれて、し設の職員さんや利用者さんと一緒に作業していると、少しずつ緊張がほぐれていきました。準備をしているときから、浴衣や作務衣を着た利用者さんが笑顔で歩いていて、「髪飾りをつけたよ」とか「かわいい？」と言って嬉しそうにされて

おり、「今日は特別な日なんだ」というわくわくした雰囲気伝わってきました。驚いたのは利用者さんのほとんどが浴衣と作務衣を着てあることでした。90人以上の利用者さんが参加されているそうでしたが、着付けやセットも職員さんたちでされたそうでした。保護者の方や地域の方もたくさん来られており、会場はとてものにぎわっていました。

私が任された役割は、かき氷の屋台でした。職員さんが削ったかき氷にシロップや練乳をかけたり、スプーンをつけたりする作業をしました。利用者さんの中には、いちごシロップを選んで「ピンクが可愛い」と喜ぶ人や、「ブルハワイを食べるのは初めて」と笑う人もいて、かき氷を渡すたびに「ありがとう」と言ってもらえたり、言葉はないけど嬉しそうに受け取って行かれる人もいました。焼きそばやバーベキュー・焼き鳥・綿菓子・ポップコーンなどの屋台があり、かき氷もなかなかの人気で、冷たい氷で少しでも涼んでもらえているのだと思うと、私も自然と笑顔になれました。

夜になると、夏祭りの最後を飾る花火が打ち上げられました。30分間も続いた花火は、色とりどりに夜空を照らし、会場全体を明るくしました。利用者さんは「わ～きれい」「すごい」「たまや～」と声をあげ、浴衣や作務衣をゆらしながら空を見上げていました。その姿は本当に楽しそうで、私も一緒に感動していました。花火を見ながら、「障害があるかどうか関係なく、誰もが同じように楽しみ、同じように感動できる」ということを強く感じました。

花火が終わった後は、テーブルやいすの片付けを手伝いました。疲れていたけど、みんなで協力して片付けると達成感がありました。片付けの最中にも「今日はありがとう」「助かったよ」と声をかけてもらい、私の方こそ「参加できてよかった」と心から思いました。この体験を通して、私は人権について考えました。人権とは、だれもが大切にされ、尊重される権利のことです。最初の私は「障害がある人」と特別に意識してしまっていたのですが、一緒に過ごすうちに、「障害のある人」と「ない人」という

区別よりも、一人一人の笑顔や気持ちの方がずっと大切なのだと感じました。

人を特別視して距離を置くのではなく、同じ立場でふれあい、思いやること。それが人権を守ることにつながるのだと思います。花火を見上げながら一緒に「きれいだね」と言い合えた時間は、私にとってわすれられない宝物になりました。

これから学校生活や日常の中でも、困っている人がいたら勇気を出して声をかけたり、気づいたことを行動に移せる自分でありたいです。小さな一歩かもしれませんが、人を大切にする気持ちが広がれば、きっとみんなが安心してすごせる社会になると信じています。